

新井中央小だより

No. 310

ホームページ <https://myoko.schoolweb.ne.jp/15020005>メールアドレス myoko.araichuou-es@edu-niigata.ed.jp

2025（令和7）年9月30日

アクティビティで学ぶ人権教育、同和教育

9月19日に、当校で「人権教育、同和教育を学ぶ会」を開催いたしました。多くの保護者・地域の皆様からご参観いただき、感謝申し上げます。

講演会では、上川多実様から、「部落差別をなくすために大人も子どもも知らなければならないこと」をテーマに、6年生と保護者・地域の方、学校関係者、職員を対象に、ご講話いただきました。前半の1～5年生の公開授業では、差別をされた人に焦点を当て、そのつらさについて当事者意識を高めることで差別解消を目指す学習を観ていただきましたが、上川様は、差別する側に焦点を当ててお話しくださいました。

上川様は、そもそも差別とは区別と違い、差によって不利な状況になり、不当な扱いを受けることであることを押さえてくださいました。マジョリティがマイノリティを差別する場合、差によって自動的に有利な状態になった側が優遇される状況になります。身体的な障がいのある方が遠くに位置する特別支援学校へ通うために近くの学校へ通うことができなかつたり、性的マイノリティの方が使いたいトイレに入れなくて困ったりするのも、社会の中にある差別であることが分かりました。そう考えると社会の中には、知らなかった差別、気付けなかった差別が多いと考えられます。多くの人が困らないため、気付かず、いつも当たり前と思っていることの中に差別はあるのです。

上川様は、ご講演の中で、6年生に分かりやすいアクティビティを提供してくださいました。6年生は、横と縦の長い列になって座って聴講しているのですが、その6年生全員に小さな紙を渡し、一列目の前の中央付近に枠を置き、「小さな紙を投げてその枠に入ったら、毎日の給食の献立などを好きに決めることができる」というアクティビティです。もちろん、後ろの列で外側に座る6年生は、不利な状態にあります。後ろの方から、「前の人、座って！」と声に出す児童がいたそうですが、多くの児童はそれを聞き取れず、後ろを見ずに夢中になって前の枠を見て、紙を飛ばそうとしています。この時に、後ろの人が不利な状態にいることを気付かず、知らず、何もしないでいることが、差別となるというアクティビティです。

私は、このアクティビティで目から鱗が落ちました。今までの私たちの生活において、あまりこのように不利な状況にある人、困っている人、多くの人の考えと違う考えをもっている人、少数派の人のことを見たり、気付いたり、思い巡らしたりしていないということを認識できたからです。それでは、差別が無くなりません。そして、誰でも時によって、差別者になるということです。それを自覚しなければいけません。この後のワークショップで、あるグループが「このアクティビティで、不利な人のことを考えて、ルールを決められないか」を話し合っていました。差別されている人がいることを見て、気付いて、知って、思い巡らして、自分たちにできる対応や解決方法（この場合はルール）を考えて、実行することが重要なのだと感じました。

私たちは、困っている人がいることを知らないことが多いです。知る姿勢をもつことが大切です。そして、知らないうちに差別してしまっていることがあります。「自分がどんなことで差別をするのか。そして、どうしたらそのことに気付いていけるのかを考えていく。さらにどんなルールがあればよいのか与えられた条件の中で考えていく。どうしたら差別を無くせる社会になるのかを考えていく。」上川様から学んだことを大事にしていきたいです。